繊維学会の現状と今後

The Society of Fiber Science and Technology, Japan—Today and Tomorrow

白 井 汪 芳

明けましておめでとうございます。平素からの繊維学会へのご支援、ご協力に感謝申し上げます。

さて、繊維学会創立 60 周年記念事業は一昨年(2005)の 6 月 9 日～11 日に東京・タワーホール船堀で行われた年次大会期中の記念式典・講演・記念パーティーをクライマックスに、また、同年 6 月 30 日～8 月 31 日まで行われた「疾走するファイバー展」、「みらいせんい展」、さらに、各種の記念出版などすべて昨年終了致しました。繊維業界の厳しい状況下で 40、50 周年と異なり、この一連の行事等の事業の実施に当たっては、大変ご心労をおかけしてきたものと思いますが、会員の皆様、また会員企業のご支援と関係の皆様方の献身的なご協力・ご努力があって、赤字にならずに終わることができました。

60 年を節目に繊維学会をとりまく情勢も大きく変わりつつあります。21 世紀はグローバル化と個性化の時代と言われています。すでに繊維産業の生産も消費もアジアが中心になっています。そのため、アジアにおける繊維の国際会議が頻繁に行われるようになりました。

梶原副会長他発起人となったアジアの繊維科学者の個人レベルの繊維学会(SOTSEA)が 2002 年 8 月に韓国・大邱で発会したことはすでにお知らせしましたが、アジア繊維学会(ATC)は第 7 回が 2003 年インド・ニューデリーで、第 8 回が昨年 5 月イラン・テヘランで開催されています。宮本元会長の発起人で行われた日中繊維シンポジウム(2002.5、北京)、韓国繊維工業会設立 40 周年記念の日韓繊維シンポジウム(2003.10、ソウル)を受け、60 周年記念で日中韓の繊維シンポジウムが繊維学会主催で東京で行われたことは記憶に新しいところです。また、東華大学が主催する先端繊維・高分子材料国際シンポジウムは 2002 年から始まり、昨年 10 月に第 2 回目が開かれました。これらの会には韓国、中国、インドなど多数参加しています。繊維学会からも参加しましたが、日本からの参加は欧米と

比べても少なく、内容よりアジア諸国との交流面でも日本が孤立しないか心配です。これからも開催されるであろうアジアの繊維系学会への皆様のご参加が、日本への信頼につながるものと思います。

大手川上の繊維技術者が減っていることから個人会員、維持会員、賛助会員の減少、学会の行事参加者の減少が続いており、理事会もその対策に追われています。会員増強委員から各行事、学会誌、講習会を魅力的に、コア分野のキーパーソンによる企画、研究会の積極的な活用、会員に対する電子メール情報の提供など、様々な改革案の提案を頂いており、検討を進めています。

「繊維」の「学」がなくなれば産業も衰退するし、衣・食・住の要である衣の文化も退歩することになりましょう。

科学技術基本法が平成 7 年に制定されて、第一期、第二期科学技術基本計画の施行が終了し、第三期計画が実施されようとしています。我が国が世界のフロントランナーとしてグローバルな大競争時代を生きぬくためには独創的な科学技術の創出とこれを担う人材の育成が必須であり、それには産学官連携が必須であり、大学と産業界の win-win の関係の構築が必要であります。学会は産学官の要であり、その面での学会の役割は益々重要になっております。

第三期基本計画では、人材、基礎研究、異分野との融合、グローバル大競争時代、フロントランナー時代のイノベーション、安全・安心、環境、健康、医療、安全保障、心の豊かさ、文化伝統などがキーワードとして掲げられています。高強度繊維開発、ナノファイバーなどのプロジェクトが進んでいますが、ファイバー関連科学技術はこれらの科学技術、重要推進 4 分野、推進 4 分野すべての基幹となるものです。

若手も OB も「産」も「学」も「官」もあらゆる層を惹き付ける繊維学会への発展のために是非ご意見、ご教示を賜りますようお願いいたします。

HIROFUSA SHIRAI

信州大学理事／機能高分子学科 教授

〒386-8567 上田市常田 3-15-1

信州大学繊維学部

Tel: 0268-21-5485 Fax: 0268-21-5608

E-mail: hshirai@shinshu-u.ac.jp

〈専門〉高分子錯体化学、機能性繊維